九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

4つの成人愛着スタイルにおける愛着対象・手段・方略間での愛着行動の一貫性と安全欲求の検討

中尾, 達馬
九州大学大学院人間環境学研究院

加藤, 和生
九州大学大学院人間環境学研究院

https://doi.org/10.15017/8014

出版情報：九州大学心理学研究. 7, pp.9-19, 2006-03-31. 九州大学大学院人間環境学研究院
バージョン：
権利関係：

Kyushu University Psychological Research
2006, Vol.7, 9-19

4つの成人愛着スタイルにおける愛着対象・手段・方略間での愛着行動の一貫性と安全欲求の検討[1)]

中尾　達馬[2)]　九州大学大学院人間環境学研究院
加藤　和生　九州大学大学院人間環境学研究院

Consistency of attachment behaviors across attachment figures, means, and strategies, and security needs for 4 adult attachment styles

Tatsuma Nakao (*Faculty of human-environment studies, Kyushu university*)
Kazuo Kato (*Faculty of human-environment studies, Kyushu university*)

The purpose of this study was twofold: (1) To investigate whether the pattern of frequency differences in attachment behaviors among 4 attachment styles are consistent across attachment figures, means, and strategies, and (2) to examine their differences in security needs that have been theoretically assumed. 211 college students were asked to respond to a questionnaire. Main findings were as follows. (1) Secure and Preoccupied engaged in attachment behaviors more frequently than Dismissing and Fearful-avoidant, regardless of the types of attachment figures (e.g., mother, romantic partner), means (e.g., mail, telephone), and strategies (proximity-maintenance, expressing own feelings more openly). (2) Secure, Preoccupied, and Fearful rated higher for security needs than Dismissing. Those findings were interpreted to demonstrate the validity of the implicitly held, but prevailing, hypothesis: Adult attachment styles do reflect the corresponding patterns of attachment behaviors.

Keywords: Adult attachment behaviors, 4 attachment styles, consistency, security needs, attachment figures

成人愛着研究では今まで，「成人愛着スタイル[3)]は成人の愛着行動[4)]パターンの違いを反映する」と暗黙の内に前提してきた（e.g., 中尾・加藤，2001，2005）。この前提とは，4つの愛着スタイルによる愛着行動の出現頻度の差にパターンが存在し，この頻度差のパターンは，いろいろな状況などを通して，一貫性をもつということを仮定するものである（なお，本稿では，この4つの愛着スタイル間の頻度差のパターンを，「愛着スタイルによる愛着行動頻度差のパターン」と呼ぶことにする）。

だがこの前提は，本当に妥当なのだろうか。実際，この点を重要な問題として取り上げ実証的に検討した研究は，著者たちの知る限り，ほとんど存在しない。もしこの前提の妥当性が危ういものであるとするならば，成人において愛着スタイルを想定することの根拠を失い，今までに蓄積された成人愛着の知見までもが疑わしいものになってしまうだろう。というのは，多くの成人愛着研究は，実際，この前提を踏まえ，成人愛着スタイルと他の重要な心理的変数（e.g., 精神的健康）との関連を検討してきているからだ。

今までに「愛着スタイルによる愛着行動頻度差のパターン」を取り上げ，これを検討した研究としては，次の4つを挙げることができる（Brennan & Shaver, 1995; Collins & Feeney, 2000; Fraley, Davis, & Shaver, 1998; Fraley & Shaver, 1998）。これらの結果を整理すると，「安定型やとらわれ型は，拒絶型や恐れ型に比べて，愛着行動をより行う」というようになる。

---

1) 本研究は九州大学大学院人間環境学研究科に提出した修士論文（2000年）の一部に加筆・修正を行ったものである。また，本研究の一部は日本心理学会第64回大会（京都国際会館）において発表を行いました。

2) 本研究を行うにあたりご指導下さいました九州大学丸野俊一先生，京都大学遠藤利彦先生をはじめ，いろいろとご協力・助言をして頂きました笠原正洋先生，假谷園昭彦先生，藤田敦先生，研究室の皆様方に心より感謝を申し上げます。また，調査にご協力頂いた方々に謝意を表します。

3) 現在，成人愛着研究では愛着スタイルを2次元（2因子）にもとづき4つのタイプに分類する（Bartholomew & Horowitz, 1991; Brennan, Clark, & Shaver, 1998）。すなわち，(1)安定型（Secure）は「親密性の回避（Avoidance）」と「見捨てられ不安（Anxiety）」の傾向がともに低いスタイル，(2)拒絶型（Dismissing）は「親密性の回避」の傾向が高く「見捨てられ不安」の傾向が低いスタイル，逆に(3)とらわれ型（Preoccupied）は「親密性の回避」の傾向が低く「見捨てられ不安」の傾向が高いスタイル，最後に(4)恐れ型（Fearful）は「親密性の回避」と「見捨てられ不安」の傾向がともに高いスタイルである。また，「親密性の回避」が高いほど，他者観（他者についての内的作業モデル）はネガティブであり，「見捨てられ不安」が高いほど，自己観（自己についての内的作業モデル）はネガティブである。

4) 本研究では愛着行動を次のように定義する。すなわち，「ネガティブ感情喚起場面において，そのネガティブ感情を解消するために，他者と何らかのかかわりを持とうとすること，またはその意図にもとづき実際のやりとりを行うこと（中尾・加藤，2001）」である。

だが，これら4つの研究は，「愛着スタイルによる愛着行動頻度差のパターン」の内容を示すにとどまり，この違いが状況を通して一貫性をもつといった点を検討していなかった。そのため，冒頭の前提の妥当性は必ずしも明確に確認されていない。

こうした問題意識にたち，中尾・加藤（2005）は，限られた場面に特化して検討した4つの先行研究で得られた「愛着スタイルによる愛着行動頻度差のパターン」が，中尾・加藤（2001）が実証的に導き出した12の愛着場面（愛着行動を喚起するネガティブ感情喚起場面）においても一貫しているかどうかを検討した。その結果，「愛着スタイルによる愛着行動頻度差のパターン」は，愛着場面の種類（e.g.，失恋，新奇場面）に関わらず，一貫していることが示された。換言すると，「愛着スタイルによる愛着行動頻度差のパターン」の状況間一貫性は，理論的に想定されたように，存在することが確認されたと言えるであろう。

だが，「愛着スタイルによる愛着行動頻度差のパターン」の問題は，単に状況間一貫性の問題だけであろうか。中尾・加藤（2001）は，成人の愛着行動を，成人の自由記述を質的に分析することで，少なくとも5つの要素（愛着場面，ネガティブ感情[5]，愛着対象，愛着行動の手段や方略，安全欲求）があることを明らかにしている。であるとするならば，状況間一貫性に加えて，①愛着対象・②愛着行動の手段・③愛着行動方略における「愛着スタイルによる愛着行動頻度差のパターン」の一貫性も検討する必要があるであろう。

またこれに加えて，④安全欲求についても，理論的には4つの愛着スタイルにおいて違いがあることが想定されている。だが，それを実証的に検討したものはない。

これまでの蓄積された成人愛着スタイル研究の基礎を固める上でも，これらの課題についての実証的検討は，地道ではあるが不可欠なものと言えよう。そこで，本研究では以下の点について検討を行う。

1．愛着対象（対象間一貫性）　上記の5つの成人愛着行動研究において得られた「安定型やとらわれ型は，拒絶型や恐れ型に比べて愛着行動をより行う」という「愛着スタイルによる愛着行動頻度差のパターン」は，愛着対象の種類に関わらず一貫して得られるのであろうか（対象間一貫性）。また，ここで言う「愛着スタイルによる愛着行動頻度差のパターン」が得られる愛着対象とは，具体的には誰を指すのだろうか（e.g.，友人，母親，先生）。というのは，成人は，乳幼児とは異なり，一定以上の親しさの人に対してであれば愛着行動を行うことができる（Bowlby，1969）からである。

Florian, Mikulincer, & Bucholtz（1995）は，愛着スタイルによるサポート・シーキング[6]の違いが親子関係を超えてピア関係にまで般化しているかどうかという視点から，困難な状況下での愛着対象へのサポート・シーキングにおいて愛着スタイルによる違いが見られるかどうかを検討した。その結果，(a)成人は概して，1.恋人・配偶者，2.同性の友人，3.母親や異性の友人，4.父親の順でこれらの対象に対してサポート・シーキングを行うこと，(b)愛着対象の種類に関わらず，安定型はアンビバレント型や回避型に比べてサポート・シーキングを行うこと（i. e.，愛着スタイルによるサポート・シーキングの違いは親子関係を超えて親密な対人関係全般に般化していること）が示された。したがって，「愛着スタイルによる愛着行動頻度差のパターン」には，対象間一貫性があることが示されたと言えよう。

だがFlorian et al.（1995）では，成人にとって主要な愛着対象である「親友（最も親しい友人）」や「きょうだい」（e.g., Hazan & Zeifman，1994）が愛着対象に含まれていなかった。さらに，一定以上の親しさがある他の対象（e.g.，先輩・後輩，先生，祖父母）も指標として含まれていなかった。また，現在成人愛着研究で主流になりつつある2次元・4分類モデル（脚注3）に従った愛着スタイル尺度（e.g., Bartholomew & Horowitz，1991）が用いられていなかった。そこで本研究では，上記の点を踏まえて，Florian et al.（1995）で得られた対象間一貫性の知見を再度検討する。

2．愛着行動の手段（手段間一貫性）「愛着スタイルによる愛着行動頻度差のパターン」は，愛着行動の手段（e.g.，電話，メール）に依らず一貫しているのだろうか（手段間一貫性）。というのは，成人は，乳幼児とは異なり，様々な手段を用いて他者との心理的・物理的近接を得ることができるからである。実際，Bowlby（1969，p.261）は，加齢に伴い，写真，手紙，電話による会話が愛着行動の手段となり得ると仮定している。

だが，著者らの知る限りでは，愛着行動における手段間一貫性の問題を取り上げ，これを検討した研究はなされていない。そこで本研究では，探索的にこの点についても検討を行う。

3．愛着行動方略（方略間一貫性）「愛着スタイルに

[5] ネガティブ感情について：多くの成人愛着研究において，とらわれ型や恐れ型が，安定型や拒絶型に比べて，ネガティブ感情をより強く感じるという結果が示されている（中尾・加藤，2005）。

[6] サポート・シーキングを「安全な隠れ家（safe haven）」の愛着行動として捉える場合もある（e.g., Collins & Feeney，2000）。しかし，両者にはいくつかの違いがあるため，成人愛着行動研究にはサポート・シーキング研究を含めなかった。例えば，愛着行動は自他の物理的および心理的近接性を求める行動であるが（Bowlby，1969），サポート・シーキングは必ずしもそれを得るために行われるとは限らない。

よる愛着行動頻度差のパターン」は，愛着行動方略の種類においても一貫して得られるのだろうか（方略間一貫性）。だが，前述の5つの愛着行動研究では，成人愛着行動の非常に限られた側面しか検討していないため，この問いに十分に答えるものではない。

例えば，Collins & Feeney (2000) や Fraley & Shaver (1998) は，恋愛関係における特定場面（e.g., 空港での分離）しか取り扱っていない。さらに，これらの研究では，どの行動が愛着行動でありどの行動がそうではないのかの区別がなされていない。また，Brennan & Shaver (1995) や Fraley et al. (1998) は，成人に固有な愛着行動の特徴を全く考慮しておらず，乳幼児の愛着行動の記述だけを参考にしながら成人愛着行動尺度を作成している[7]。

そこで本研究では，認知発達に伴った対人モニタリングや自己制御の発達（e.g., Kato, 1995）を考慮しながら，成人が日常生活の様々な場面で行う愛着行動の自由記述にもとづき愛着行動方略尺度を作成する。そして様々な愛着行動方略において一貫して愛着スタイルによる違いが得られるかどうかを検討する。

4．安全欲求[8]　「恐れ型は拒絶型に比べて安全欲求（他者とのかかわりを通して主観的安全感を得たいという欲求）が高い（Bartholomew & Horowitz, 1991）」という理論的前提は妥当なのだろうか。というのは，著者らの知る限りでは，このことを問題として取り上げ，そして実証的に検討した研究はなされていないからである。そこで本研究では，この点についても検討を行う。

以上をまとめると次のようになる。すなわち，本研究の目的は以下の2つを検討することである。

a．「愛着スタイルによる愛着行動頻度差のパターン」は，①愛着対象・②愛着行動の手段・③愛着行動方略を超えて一貫しているかどうか。

b．恐れ型は，拒絶型に比べて，④安全欲求が高いかどうか。

方　法

調査対象者　調査対象者は大学生211名（平均年齢20.4歳；男45名，女165名，無記入1名）であった。

質問紙　質問紙は次の4つのパートから構成された。すなわち，(1)フェイスシート（i.e., 学部，学年，年齢，性別），(2)愛着スタイル尺度，(3)愛着行動質問紙，(4)安全欲求尺度であった。

なお，評定は全て7件法で求めた。具体的には，愛着スタイル尺度と安全欲求尺度では，1＝「全く当てはまらない」から7＝「非常によく当てはまる」が用いられた。そして，対象別関与度尺度と愛着行動尺度では，1＝「全くしなかった」から7＝「非常によくした」（頻度）が用いられた。

4分類愛着スタイル尺度（1）「関係尺度（Relationship Questionnaire, Bartholomew & Horowitz, 1991; 加藤訳，1999 以下RQと略す）」を用いた。RQは，一般他者についての4分類愛着スタイル（安定型，拒絶型，とらわれ型，恐れ型）を決定するための強制選択式尺度であり，その信頼性や妥当性は，加藤（1999）や中尾・加藤（2004a）で既に確認されている。

回答に際し調査対象者は，4つの愛着スタイルの特徴が記述してある文章を読み，それぞれについて自分にどのくらいよく当てはまるかを7件法で評定した。次に，その4つの中から最もよく当てはまる愛着スタイルを1つ選択した。RQでは，この最後に1つ強制選択させたものを，その個人の愛着スタイルとみなした（愛着スタイルの割合については，Table 3を参照のこと）。

4分類愛着スタイル尺度（2）「多項目式関係尺度（Relationship Scale Questionnaire, Griffin & Bartholomew, 1994; 中尾・加藤訳，2003，以下RSQと略す）」を用いた[9]。RSQは，愛着スタイルの2因子（親密性の回避，見捨てられ不安）を測定するための尺度であり（30項目），その信頼性や妥当性は中尾・加藤（2003）で既に確認されている。

愛着行動質問紙　愛着行動質問紙は，(a)対象別関与度尺度，(b)愛着行動尺度，(c)安全欲求尺度の3つから構成された。なお，これら3尺度は，女子大学生191名を対象とした愛着行動の自由記述の内容分析（中尾・加藤，2001）にもとづき作成された。

共通の教示・手続き　愛着行動は，主観的安全感が脅かされた状況で行われる行動である（Bowlby, 1969; 中尾・加藤，2001）。そこで，調査対象者に主観的安全感

[7] Brennan & Shaver (1995) は，Ainsworth, Blehar, Waters, & Wall (1978) で用いられている乳幼児のコーディングシステムにもとづき，「分離の後に喜んで自身のパートナーを探し求めようとすること，自身のパートナーとニュースやアイディアを共有しようとすること，必要時に自身のパートナーの元へ戻ること（p.271）」に焦点を当て項目を作成した。また，Fraley et al. (1998) は，「乳幼児期において概して観察できる種類の分離行動（p.253）」にもとづき，愛着行動尺度を作成した。

[8] 多くの成人愛着研究では，「主観的安全感（security）を得たいという欲求」を愛着欲求（attachment needs）と称している（e.g., Brennan & Shaver, 1995）。だが，愛着欲求と称すると「愛着関係を持ちたいという欲求，自他の愛着の存在を確認したいという欲求，他者に近接したいという欲求」というニュアンスが混ざり込んでしまう。そこで本研究では，先の定義をより厳密に表現するために愛着欲求ではなく「安全欲求（security needs）」という用語を用いる。

[9] 現段階では，愛着スタイルを測定するためには，RSQよりも「親密な対人関係体験尺度（the Experiences in Close Relationships inventory, Brennan et al., 1998，以下ECRと略す）」の方がより適切であると考えられる（e.g., 中尾・加藤，2003）。だが本研究は，ECRの日本語版作成（中尾・加藤，2004a，2004b）が行われる前に実施されたため，RSQが用いられている。なお，RSQとECRの項目内容は類似している。

が脅かされる状況を8つ例示し（e.g.，人に冷たくされる，身の危険を感じる），その後に次の教示を行った。すなわち，「先程の例のように，自分が大切に感じているもの（e. g.，価値観）が傷つけられる，あるいは身の危険を感じるといったネガティブな感情（e.g.，不安，悲しみ）を体験している状況を思い浮かべながら回答して下さい」である。次いで，以下の(a)から(c)の尺度に回答することを求めた。

(a)対象別関与度尺度　対象別関与度尺度は，18対象（Table 1参照）に対して，主観的安全感が脅かされた状況で，「誰かとかかわろうとする行動（愛着行動）」をどのくらい頻繁に行ったのかを測定するための尺度である。単一項目式あり，項目数は18であった。

(b)愛着行動尺度　愛着行動尺度は，成人が行う愛着行動方略とそれらの方略を行う際の手段を測定するための尺度である。具体的には，愛着行動方略尺度（多項目式，39項目）と愛着行動手段尺度（単一項目式，4項目）から構成された（項目例は，Table 3と4を参照）。

(c)安全欲求尺度　安全欲求尺度は，成人が愛着行動を行う際の安全欲求（i.e.，なぜ愛着行動を行ったのか，愛着行動を行う理由）を測定するための尺度である（28項目）。

実施時期　1999年11月に調査を行った。

結果と考察

以下の分析における尺度得点は全て，以下の方法により算出した。すなわち，単一項目式尺度については，それぞれの項目得点や平均値を尺度得点とした。また，多項目式尺度については，尺度得点を各因子に対応する項目の評定値の平均として算出した。

1．愛着対象（対象間一貫性）

1-1．18対象全て　「成人にとっての主たる愛着人物は，友人・恋人・家族である」という結果が，面接（Hazan & Zeifman，1994）や自由記述（中尾・加藤，2001）の内容分析を通して得られている。では，成人は本当に，他の対象に比べて，これらの対象に対して愛着行動をより行うのであろうか。また，「愛着スタイルによる愛着行動頻度差のパターン」は，これらの対象においてのみ得られるのだろうか。

Table 1は，対象それぞれについて平均値を算出したものである。Table 1から分かるように，評定平均4.0以上の対象は，友人（非常に親しい，まあまあ親しい）・恋人・母親だけであった。したがって，成人にとっての主たる愛着対象は，友人・恋人・家族であると言えよう（なお，予想に反して，父親ときょうだい（兄弟姉妹）の評定平均は4.0より低かった）。

探索的に，18対象それぞれの尺度得点について，RQによる愛着スタイルの4分類間で違いがあるかどうかを，一元配置分散分析により検討した（Table 1）。その結果，愛着スタイルの主効果は，友人（非常に親しい，まあまあ親しい）・母親・妹・父親において有意であった。そこでTukeyの*HSD*検定を行ったところ，これらの対象においては，安定型は，それ以外の愛着スタイルに比べて，愛着行動をより行っていた（Table 1）。したがって，「愛着スタイルによる愛着行動頻度差のパターン」は，友人・家族において見られると言えよう[10]。

以上の結果をまとめると，愛着行動の行われやすさや「愛着スタイルによる愛着行動頻度差のパターン」という点からも，「成人にとっての主たる愛着人物は，友人・恋人・家族である」という従来の知見が確認されたと言えよう。そこで以下では，これらの対象についてより詳細な分析を行う。

1-2．友人・恋人・家族　本研究の第1の関心事項は，「愛着スタイルによる愛着行動頻度差のパターン」は，親友（非常に親しい友人）・恋人・母親・父親・きょうだいという愛着対象の種類に関わらず一貫しているのだろうかということであった。そこで，対象別関与度尺度の尺度得点について，4（愛着スタイル：安定型，拒絶型，とらわれ型，恐れ型）×5（愛着対象：親友・恋人・母親・父親・きょうだい[11]）の混合要因の分散分析を行った[12]（記述統計については，Table 2参照）。愛着スタイルは被験者間要因であり，愛着対象は被験者内要因であった。

その結果，愛着スタイルと愛着対象の主効果が有意であった（それぞれ，$F(3,110)=4.58$，$p<.01$；$F(4,440)=52.81$，$p<.01$）。また，愛着スタイル×愛着対象の交互作用は有意でなかった（$F(12,440)=0.28$，n.s.）。そこで有意であった主効果についてTukeyの*HSD*検定を行った結果（Table 2），(1)愛着スタイル：安定型は，拒絶型や恐れ型に比べて，愛着行動をより行っていた。また，(2)愛着対象：成人は，「親友・恋人」，「母親」，「父親・きょうだい」の順で愛着行動をより行っていた。

これらの結果は，Florian et al.（1995）の結果とほぼ一致するものであった。したがって，4分類愛着スタイ

---

[10] 恋人において有意差が得られなかったのは，本研究では恋愛期間を指標として組み込んでいなかったためであると考えられる（Hazan & Zeifman（1994）によると恋愛期間が2年以上なければ，恋人との間に明確な愛着関係が形成されないため）。

[11]「きょうだい」の得点については，操作的に，姉・妹・兄・弟の平均値とした。例えば，姉と弟がいる人は，それらの平均値とした。また，一人しかきょうだいがいない場合には，そのきょうだいの得点をもって，きょうだい得点とした。

[12] 性別を加味した再分析を行ったが，性別による結果のパターンの違いは得られなかった。このことは他の分析でも同様である。

Table 1
日本語版 RQ における 18 対象への関与度の平均値（*SD*）[a]

		安定型	拒絶型	とらわれ型	恐れ型	*F*	Tukey の *HSD* 検定
1. 非常に親しい友人（*M*=5.69）	***N***	**51**	**19**	**75**	**39**	***F*(3, 180)=**	**安定型＞拒絶型，恐れ型**
	***M*(*SD*)**	**6.27（1.11）**	**4.95（1.47）**	**5.75（1.60）**	**5.13（2.28）**	**4.95****	
2. 恋人（*M*=5.59）	*N*	39	13	51	28	*F*(3, 127)=	
	M(*SD*)	5.90（1.71）	4.92（1.85）	5.69（1.56）	5.29（1.88）	1.44	
3. まあまあ親しい友人（*M*=4.43）	***N***	**51**	**20**	**78**	**42**	***F*(3, 187)=**	**安定型＞拒絶型**
	***M*(*SD*)**	**4.76（1.41）**	**3.55（1.73）**	**4.51（1.62）**	**4.29（1.55）**	**3.09***	
4. 母親（*M*=4.33）	***N***	**50**	**20**	**77**	**43**	***F*(3, 186)=**	**安定型＞拒絶型**
	***M*(*SD*)**	**5.00（1.84）**	**3.40（2.23）**	**4.29（2.16）**	**4.05（2.33）**	**3.18***	
5. 好きな人(片思いの相手)（*M*=3.73）	*N*	34	14	56	25	*F*(3, 125)=	
	M(*SD*)	3.76（2.05）	2.79（2.15）	4.16（2.29）	3.24（2.20）	2.00	
6. 姉（*M*=3.67）	*N*	15	8	20	11	*F*(3, 50)=	
	M(*SD*)	3.87（2.77）	2.88（2.17）	3.90（2.17）	3.55（2.50）	0.39	
7. 先輩（*M*=3.54）	*N*	46	18	69	38	*F*(3, 167)=	
	M(*SD*)	3.87（2.00）	2.89（2.22）	3.61（2.06）	3.34（2.15）	1.11	
8. 妹（*M*=2.91）	***N***	**24**	**7**	**33**	**17**	***F*(3, 77)=**	**安定型＞とらわれ型，恐れ型**
	***M*(*SD*)**	**3.96（2.35）**	**1.57（0.98）**	**2.39（1.94）**	**3.00（2.37）**	**3.59***	
9. 兄（*M*=2.76）	*N*	17	7	29	18	*F*(3, 67)=	
	M(*SD*)	2.29（2.08）	2.57（2.07）	3.14（2.07）	2.67（1.50）	0.73	
10. 父親（*M*=2.69）	***N***	**50**	**19**	**75**	**42**	***F*(3, 182)=**	**安定型＞拒絶型，とらわれ型，恐れ型**
	***M*(*SD*)**	**3.58（2.07）**	**2.00（1.29）**	**2.48（1.78）**	**2.31（1.75）**	**5.87****	
11. 先生（*M*=2.66）	*N*	50	20	77	42	*F*(3, 185)=	
	M(*SD*)	2.42（1.75）	2.25（1.74）	2.92（2.11）	2.64（1.95）	1.02	
12. ペット（*M*=2.56）	*N*	26	10	47	25	*F*(3, 104)=	
	M(*SD*)	2.58（2.19）	1.70（1.64）	2.66（2.11）	2.68（2.32）	0.60	
13. 弟（*M*=2.48）	*N*	21	9	31	19	*F*(3, 76)=	
	M(*SD*)	3.14（2.29）	1.67（1.12）	2.19（1.47）	2.58（1.92）	1.84	
14. 後輩（*M*=2.13）	*N*	48	18	66	38	*F*(3, 166)=	
	M(*SD*)	2.54（1.77）	1.56（1.25）	2.14（1.57）	1.87（1.71）	2.09	
15. あまり親しくない友人（*M*=2.08）	*N*	50	19	76	41	*F*(3, 182)=	
	M(*SD*)	2.10（1.11）	1.53（0.96）	2.08（1.37）	2.32（1.71）	1.47	
16. 祖母（*M*=1.70）	*N*	42	15	69	37	*F*(3, 159)=	
	M(*SD*)	1.88（1.61）	1.00（0.00）	1.70（1.28）	1.78（1.55）	1.57	
17. 親戚（*M*=1.63）	*N*	49	16	76	40	*F*(3, 177)=	
	M(*SD*)	1.80（1.49）	1.31（0.79）	1.57（1.11）	1.68（1.47）	0.68	
18. 祖父（*M*=1.47）	*N*	32	10	62	29	*F*(3, 129)=	
	M(*SD*)	1.41（1.16）	1.00（0.00）	1.48（1.02）	1.66(1.54)	0.84	

[a] 点線は，尺度得点の平均が，4.0 以上，3.0 以上，2.0 以上を示す。また，探索的に，18 対象それぞれへの関与度の平均値について，愛着スタイルを独立変数とする 1 元配置分散分析を行った結果，愛着スタイルの主効果が有意であったものについては，太字で示した。

Table 2
日本語版RQにおける主たる愛着対象への関与度の平均値（*SD*）[a)]

		安定型 (*N*=35)	拒絶型 (*N*=12)	とらわれ型 (*N*=43)	恐れ型 (*N*=24)
親友	*M*	6.29	4.75	5.53	4.83
	(*SD*)	(1.23)	(1.42)	(1.80)	(2.44)
恋人	*M*	5.83	5.08	5.58	5.13
	(*SD*)	(1.77)	(1.83)	(1.62)	(1.96)
母親	*M*	4.83	3.50	4.60	3.96
	(*SD*)	(1.79)	(2.11)	(2.21)	(2.42)
父親	*M*	3.20	2.42	2.88	2.17
	(*SD*)	(2.03)	(1.44)	(1.92)	(1.71)
きょうだい	*M*	3.51	2.50	3.09	2.75
	(*SD*)	(1.84)	(1.80)	(2.07)	(1.88)

a) 4（愛着スタイル）×5（愛着対象）の分散分析を行った結果，愛着スタイルおよび愛着対象の主効果が有意であった。そこで，Tukeyの*HSD*検定を行った結果，以下の2点が示された。すなわち，(1)愛着スタイル：安定型＞拒絶型，恐れ型，(2)愛着対象：親友，恋人＞母親＞父親，きょうだいであった（多重比較の際に用いた誤差項は，(1)では6.67，(2)では2.84であった）。

Table 3
日本語版RQにおける愛着行動手段尺度の平均値（*SD*）[a)]

		安定型 (*N*=50)	拒絶型 (*N*=20)	とらわれ型 (*N*=78)	恐れ型 (*N*=43)
1. 直接会って話を聞いてもらった。	*M*	5.94	4.70	5.65	4.77
	(*SD*)	(1.25)	(2.03)	(1.73)	(2.22)
2. 電話で話を聞いてもらった。	*M*	4.90	3.25	5.50	4.81
	(*SD*)	(2.23)	(2.36)	(1.86)	(2.27)
3. メール（携帯，パソコン，など）を出した。	*M*	3.92	2.50	4.00	3.44
	(*SD*)	(2.34)	(2.09)	(2.31)	(2.37)
4. 手紙を書いた。	*M*	3.16	2.40	4.27	3.14
	(*SD*)	(2.17)	(2.30)	(2.19)	(2.22)
5. 親しい人の写真を見て安心しようとした。	*M*	2.00	1.60	2.54	2.16
	(*SD*)	(1.58)	(1.35)	(1.98)	(1.70)

a) 4（愛着スタイル）×5（手段）の分散分析を行った結果，愛着スタイルおよび手段の主効果が有意であった。そこで，TukeyのHSD検定を行った結果，以下の2点が示された。すなわち，(1)愛着スタイル：安定型，とらわれ型＞拒絶型；とらわれ型＞恐れ型，(2)手段：直接会って，電話＞メール，手紙＞写真であった（多重比較の際に用いた誤差項は，(1)では8.74，(2)では3.05であった）。

ル尺度を用いかつ成人の主たる愛着対象として「親友（最も親しい友人）」や「きょうだい」を含めた場合についても，「愛着スタイルによる愛着行動頻度差のパターン」の対象間一貫性が明らかになったと言えよう。

2. 愛着行動の手段（手段間一貫性）

「愛着スタイルによる愛着行動頻度差のパターン」は，第2の要素である愛着行動の手段においても一貫しているのだろうか。このことを検討するために，愛着行動手段尺度の尺度得点について，4（愛着スタイル：安定型，拒絶型，とらわれ型，恐れ型）×5（愛着行動の手段：直接会って，電話，メール，手紙，写真）の混合要因の分散分析を行った（記述統計については，Table 3参照）。愛着スタイルは被験者間要因であり，愛着行動の手段は被験者内要因であった。

その結果，愛着スタイルと手段の主効果が有意であっ

た（それぞれ，F (3, 187)＝7.87，p<.01；F (4, 748)＝76.60，p<.01）。また，愛着スタイル×手段の交互作用は有意傾向であった（F (12, 748)＝1.73，p<.10）。愛着スタイルの主効果が有意だったので，Tukey の *HSD* 検定を行った結果（Table 3），安定型やとらわれ型は拒絶型に比べて，またとらわれ型は恐れ型に比べて，愛着行動をより行っていた。そして，手段の主効果が有意だったので，Tukey の *HSD* 検定を行った結果（Table 3），成人は，「直接会って，電話」，「メール，手紙」，「写真」の順で，愛着行動をより行っていた。

[13] 本研究は1999年に実施されており，現在に比べるとパソコンや携帯電話によるメールが普及していなかった。そのため，メールが他の手段に比べてどの程度愛着行動の手段として用いられるのかについては，今後も検討を行う必要があろう。

[14] 本研究では，愛着行動のそれぞれの要素をより詳細に取り出すことを目的とした。そのため，因子間相関が高い因子については1つの因子にまとめずに，それぞれについて分析を行った。

これらの結果から，(1)成人は，直接会うあるいは電話という手段を用いた愛着行動を主に行うこと[13]，(2)「愛着スタイルによる愛着行動頻度差のパターン」にも手段間一貫性があることが示されたと言えよう。

3. 愛着行動方略

3-1. 愛着行動方略尺度の因子分析結果　愛着行動方略尺度39項目について因子分析（最小2乗法・プロマックス回転）を行った。3つの観点（固有値の推移，解釈可能性，因子負荷量.40以上）から因子数の決定や項目の選択を行った結果，4因子解（17項目）が適当であると判断した[14]（Table 4）。4因子による累積説明率は47.11％であった。項目の内容をもとに，第1因子を「平気な素振り」，第2因子を「近接性維持」，第3因子を「素直な伝達」，第4因子を「機嫌の悪い素振り」と命名した。また，十分な信頼性（α係数）が得られた

Table 4
愛着行動方略尺度の因子分析結果

項目	F1	F2	F3	F4
F1:「平気な素振り」（α=.78）				
1. おもしろおかしく話した。	.75	.02	.03	.01
2. 自分(私)の今の気持ちを知られたくなかったので，自分の体験を笑い話として話した。	.74	.00	.02	−.02
3. 平気なそぶりで話した。	.71	.00	−.01	−.11
4. まるで他の人のことのように話した。	.61	−.08	−.03	.04
5. 自分の気持ちを隠しながら話した。	.46	.08	−.10	.17
F2:「近接性維持」（α=.81）				
6. 相手と直接会いたかったので会う約束をとりつけた。	−.01	.78	.07	−.19
7. 一緒にいたかったので，何か(例：カラオケ，ドライブ，食事など）に誘った。	.02	.77	−.14	.00
8. いつもより長く相手と一緒にいた。	−.05	.70	.07	.03
9. 相手にかまってもらうために，相手の近くに行った。	.03	.58	.09	.16
F3:「素直な伝達」（α=.77）				
10. 具体的に話した。	−.04	−.06	.79	−.02
11. つつみ隠さずに話した。	.00	−.04	.69	−.16
12. 一生懸命に話した。	−.04	.07	.68	.16
13. 相手にアドバイスを求めた。	.03	.15	.48	.08
F4:「機嫌の悪い素振り」（α=.70）				
14. 意図的にいつもより口数を少なくした。	−.13	−.04	−.13	.73
15. 相手にかまってもらいたくて，機嫌が悪いそぶりをみせた。	.01	.07	−.11	.70
16. 自分の今の気持ちを知られたくないので，八つ当たりをした。	.10	−.09	.14	.52
17. 相手にかまってもらいたくて，困ったようなふりをした。	.08	−.02	.16	.50
因子間相関　F2	.24			
因子間相関　F3	−.09	.54		
因子間相関　F4	.29	.39	.19	

Table 5
日本語版RQにおける愛着行動方略尺度および安全欲求尺度の平均値（*SD*）[a)]

		安定型 (*N*=51)	拒絶型 (*N*=20)	とらわれ型 (*N*=78)	恐れ型 (*N*=43)	*F*	Tukey の *HSD* 検定
愛着行動方略尺度							
F1: 平気な素振り	*M* (*SD*)	2.76 (1.26)	2.74 (1.10)	2.89 (1.12)	3.15 (1.68)	$F(3, 188)=0.83$	—
F2: 近接の維持	*M* (*SD*)	4.24 (1.63)	2.71 (1.55)	4.26 (1.69)	3.52 (1.72)	$F(3, 188)=6.03^{**}$	安定型，とらわれ型＞拒絶型
F3: 素直な表現	*M* (*SD*)	5.17 (1.08)	3.69 (1.73)	4.93 (1.28)	4.52 (1.52)	$F(3, 188)=6.75^{**}$	安定型，とらわれ型＞拒絶型
F4: 機嫌の悪い素振り	*M* (*SD*)	2.82 (1.29)	2.24 (1.41)	2.78 (1.27)	2.65 (1.28)	$F(3, 188)=1.12$	—
安全欲求尺度							
F1: 安全欲求	*M* (*SD*)	5.02 (1.00)	3.62 (1.39)	5.03 (0.99)	4.65 (1.44)	$F(3, 189)=8.98$	安定型，とらわれ型，恐れ型＞拒絶型

[a)] ** $p<.01$ である。

(Table 4)。

3-2. 4つの愛着スタイルと愛着行動方略　愛着行動方略尺度の4因子の尺度得点それぞれについて，RQによる愛着スタイルの4分類間で違いがあるかどうかを，一元配置分散分析により検討した。F2：近接性維持とF3：素直な伝達において愛着スタイルの主効果が有意であったため，Tukeyの*HSD*検定を行った（Table 5上段）。その結果，安定型やとらわれ型は，拒絶型に比べて，F2：近接性維持とF3：素直な伝達の得点が有意に高かった。このことから，成人が日常生活の様々な文脈において行う愛着行動にもとづき尺度項目を作成した場合についても，「安定型やとらわれ型は，拒絶型に比べて愛着行動を行う」ということがほぼ確認されたと言えよう。また，成人の愛着行動方略が複数の因子から構成されると見なした場合には，「愛着スタイルによる愛着行動頻度差のパターン」に方略間一貫性もあると言えよう。

4. 安全欲求

4-1. 安全欲求尺度の因子分析　安全欲求尺度28項目について因子分析（最小2乗法）を行った。固有値は第1因子から順に11.97，1.67，1.53，1.32，1.09と推移していたため，この点と解釈可能性を考慮して，1因子解が適当であると判断した。

そこで最小2乗法により1因子を抽出し，解釈可能性と因子負荷量.40以上という基準により，項目の選択を行ったところ，最終的には，24項目が残った（Table 6）。1因子による累積説明率は44.65%であった。そこでこ

Table 6
安全欲求尺度の因子分析結果

項目	F1
F1:「安全欲求」（α=.95）	
1. 安心したかったから。	.80
2. 励まして欲しかったから。	.80
3. 心の支えになって欲しかったから。	.78
4. 自分の気持ちを理解して欲しかったから。	.78
5. 慰めて欲しかったから。	.75
6. 話を聞いて欲しかったから。	.72
7. 共感して欲しかったから。	.69
8. 相手にアドバイスをして欲しかったから。	.68
9. 気持ちを前向きにしたかったから。	.67
10. 元気を分けて欲しかったから。	.67
11. 今の状態をどうにかして欲しかったから。	.66
12. できないところを手助けして欲しかったから。	.65
13. 相手に話すことで気晴らしをしたかったから。	.64
14. 早く自分の抱えている問題を解決したかったから。	.64
15. 一人でいたくなかったから。	.64
16. 話さないでいることに耐えられなかったから。	.63
17. 自分のことを気にかけて欲しかったから。	.63
18. 気持ちの整理をしたかったから。	.63
19. 1人では自分の問題に直面できなかったから。	.62
20. 問題解決のためのきっかけが欲しかったから。	.60
21. 自分（私）を守って欲しかったから。	.59
22. 気持ちの切り替えをしたかったから。	.57
23. 気を紛らすことができると思ったから。	.55
24. 本来の自分（私）を取り戻したかったから。	.53
寄与	10.71

の因子を「安全欲求」と命名した。また，十分な信頼性（α係数）が得られた（Table 6）。なお，安全欲求尺度と愛着行動方略尺度の相関は，第1因子から順に.09 (n.s.)，.54 (p<.01)，.74 (p<.01)，.39 (p<.01) であった[15]。

4-2. 4つの愛着スタイルと安全欲求　安全欲求尺度の尺度得点について，RQによる愛着スタイルの4分類間で違いがあるかどうかを，一元配置分散分析により検討した。愛着スタイルの主効果が有意であったため，Tukeyの*HSD*検定を行った結果，安定型・とらわれ型・恐れ型は，拒絶型に比べて，安全欲求の得点が有意に高かった（Table 5下段）。このことから，理論的に想定されていた「恐れ型は拒絶型に比べて安全欲求が高い」という成人愛着研究における理論的前提（Bartholomew & Horowitz, 1991）の妥当性が確認されたと言えよう。

確かにこの前提は本研究でも実証された。だが，この前提には次のような制約があることに注意しておく必要があるだろう。すなわち，拒絶型は，意識レベルで安全欲求を抑圧している可能性があり，その結果，質問紙への回答では「自分は安全欲求がそんなにない」と思っているのかもしれない。であるとするならば，今後は，生理的・行動的レベルや無意識・閾下レベルにおいても，拒絶型が安全欲求において本当に低いのかどうかについても，さらに検討する必要があるだろう。

[15] 本研究では，安全欲求の要素をより詳細に取り出すことを目的とした。そのため，Table 6では，Table 4と類似した項目（e.g., 項目6や8）を削除しなかった。なお，安全欲求尺度については，これらの項目を除外しても，Table 5下段・Table 7下段および愛着行動方略尺度との相関ではほぼ同じ結果が得られる。

補足的分析（愛着行動方略と安全欲求）

では，4つの愛着スタイルを用いて得られた結果が，愛着スタイルの2因子（親密性の回避，見捨てられ不安）を用いても成り立つのだろうか。この点を確認するために，次の分析を行った。まず，中尾・加藤（2003）の結果に従い，RSQの2因子の尺度得点を算出した。そして，今までに形成された愛着スタイルが，現在の親密な対人関係での愛着行動に与える影響を検討するために，RSQの2因子の尺度得点を独立変数とし，愛着行動方略尺度の尺度得点を従属変数とする重回帰分析（強制投入法）を行った（Table 7上段）。その結果，成人は「親密性の回避」が低いほど（他者観がポジティブなほど），F2：近接性維持やF3：素直な伝達を行っていた。

また，愛着スタイルが安全欲求に与える影響を検討するために，RSQの2因子の尺度得点を独立変数とし，安全欲求尺度の尺度得点を従属変数とする重回帰分析（強制投入法）を行った。その結果，成人は「親密性の回避」が低いほど，「安全欲求」の得点が高かった（Table 7下段）。以上の2つの分析結果から，本研究において愛着スタイルの4分類を用いて得られた結果は，愛着スタイルの2因子を用いた分析によっても再現できたと言えよう。

結果の整理と今後の課題

本研究の結果を整理すると次のようになる。

1.「安定型やとらわれ型は，拒絶型や恐れ型に比べて

Table 7
重回帰分析の結果（独立変数:RSQ，従属変数:愛着行動方略尺度，安全欲求尺度）[a]

従属変数	独立変数	r	β	R	R^2	F
愛着行動方略尺度						
F1: 平気な素振り	親密性の回避	.13	.07	.21	.04	$F(2, 207)$= 4.89**
	見捨てられ不安	.20 **	.18 *			
F2: 近接性維持	親密性の回避	−.34 **	−.37 **	.35	.11	$F(2, 207)$=14.45**
	見捨てられ不安	−.02	.09			
F3: 素直な伝達	親密性の回避	−.44 **	−.46 **	.44	.19	$F(2, 207)$=24.76**
	見捨てられ不安	−.08	.06			
F4: 機嫌の悪い素振り	親密性の回避	.00	−.07	.19	.03	$F(2, 207)$= 3.88*
	見捨てられ不安	.18 **	.20 **			
安全欲求尺度						
F1: 安全欲求	親密性の回避	−.36 **	−.41 **	.39	.15	$F(2, 208)$=18.81**
	見捨てられ不安	.04	.17 *			

[a] rはピアソンの相関係数，βは標準偏回帰係数，R^2は調整済みの重決定係数である。また，** p<.01，* p<.05である。

愛着行動を行う（「親密性の回避」が低いほど，愛着行動を行う）」という「愛着スタイルによる愛着行動頻度差のパターン」は，愛着対象や愛着行動の手段・方略の種類に依らず一貫している。

2．「恐れ型は，拒絶型に比べて安全欲求が高い」という理論的想定（e.g., Bartholomew & Horowitz, 1991）は妥当である。

これらの結果から，冒頭で述べた「成人愛着スタイルは成人の愛着行動パターンの違いを反映する」という暗黙の前提は，成人の愛着行動を4つの要素（①愛着対象，②愛着行動の手段，③愛着行動方略，④安全欲求）に分けて捉えた場合にも妥当であることが実証されたと言えよう。さらに，2次元・4分類愛着スタイルモデル（脚注3参照）における「親密性の回避」と「見捨てられ不安」に焦点を当てた場合に，今までに実証されていなかった安全欲求における拒絶型と恐れ型の違い（すなわち，「親密性の回避」高群における「見捨てられ不安」高群と低群の違い）が本研究で実証できたことは注目に値するだろう。

だが，次の課題が残されている。本研究においても冒頭の5つの成人愛着行動研究と同様に安定型ととらわれ型の違い（「親密性の回避」低群における「見捨てられ不安」高群と低群の違い）を実証できなかった。そのため，愛着スタイルの2因子において「見捨てられ不安」を設定することの妥当性を実証するという課題が依然として残されている。

この課題を解決する1つの方向としては，Table 7において，成人は「見捨てられ不安」が高いほど，F1：平気な素振りやF4：機嫌の悪い素振りを行う傾向が示唆されていた。ただし，重決定係数が低いという限界がある。では，なぜ重決定係数が低かったのだろうか。その1つの可能性は，愛着行動方略尺度の質問項目は，愛着行動の行動的（方略的）側面に焦点を当て作成されたため，それを行う理由（目的や動機）の記述が含まれている項目と含まれていない項目が混在していたことが原因であると考えられる。例えば「F1：平気な素振り」では，理由のない項目が多いため，他者の反応を意識しているのか（e.g., 他者に話すことに抵抗がある，他者に迷惑をかけたくない）あるいは相互作用を回避したかったのかが不明瞭である。また，「F4：機嫌が悪い素振り」では，2つの相反する理由（相手をして欲しい vs. 自分の気持ちを知られたくない）の両方が含まれていた。したがって，今後は本研究で予備的に得られたこの結果をさらに確認し展開するために，愛着行動を行う理由を項目の中に含めるという改良が必要であろう。このような改良を行うことで「見捨てられ不安」と成人の愛着行動の間に相関関係が示される可能性は高いのではないだろうか（この方向での試みは中尾・加藤（印刷中）にて行っている）。

また本研究では，一般他者に対する愛着スタイルと「様々な対象や状況を通して，一般的・相対的に行うであろう愛着行動の基本的パターン」との関連を検討した。近年，成人における愛着スタイルを一般他者レベルと特定対象レベルにおける愛着スタイルの交互作用として考える視点が出現している（e.g., Creasey & Ladd, 2005; Klohnen, Weller, Luo, & Choe, 2005; Nakao & Kato, 2005）。これは乳幼児にはない「成人であるが故」の愛着の特徴であると考えられ，今後はこの点を踏まえた上での検討も必要になるであろう。

最後に，本研究では愛着行動を質問紙法により測定している。だが今後は，観察法や生理的指標を絡めながら，愛着行動における自己評価・他者評価や生理レベル・行動レベルなどの様々な一貫性についても検討する必要があろう。

引用文献

Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E., & Wall, S. (1978). *Patterns of attachment: A psychological study of strange situation*. Hillsdale, NJ: Erlbaum.

Bartholomew, K., & Horowitz, L. M. (1991). Attachment styles among young adults: A test of a four-category model. *Journal of Personality and Social Psychology*, **61**, 226-244.

Bowlby, J. (1969/1982). *Attachment and loss*. Vol.1. *Attachment*. England: Penguin Books.

Brennan, K. A., Clark, C. L., & Shaver, P. R. (1998). Self-report measurement of adult attachment: An integrative overview. In J. A. Simpson & W. S. Rholes (Eds.), *Attachment theory and close relationships*. NY: The Guilford Press. pp.46-76.

Brennan, K. A., & Shaver, P. R. (1995). Dimensions of adult attachment, affect regulation, and romantic relationship functioning. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **21**, 267-283.

Collins, N & Feeney, B. C. (2000). A safe haven: An attachment theory perspective on support seeking and caregiving in intimate relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, **78**, 1053-1073.

Creasey, G., & Ladd, A. (2005). Generalized and specific attachment representations: Unique and interactive roles in predicting conflict behaviors in close relationship. *Personality and Social Psychology Bulletin*, **31**, 1026-1038.

Florian, V., Mikulincer, M., & Bucholtz, I. (1995). Ef-

fects of adult attachment style on the perception and search for social support. *The Journal of Psychology*, **129**, 665-676.

Fraley, R. C., & Shaver, P. R. (1998). Airport separations: A naturalistic study of adult attachment dynamics in separating couples. *Journal of Personality and Social Psychology*, **75**, 1198-1212.

Fraley, R. C., Davis, K. E., & Shaver, P. R. (1998). Dismissing-avoidance and the defensive organization of emotion, cognition, and behavior. In J. A. Simpson & W. S. Rholes (Eds.), *Attachment theory and close relationships*. NY: The Guilford Press. pp.249-279.

Griffin, D. W., & Bartholomew, K. (1994). The metaphysics of measurement: The case of adult attachment. In K. Bartholomew & D. Parlman (Eds.), *Advance in personal relationship, Vol.***5**, *Attachment process in adulthood. London*: Jessica Kingsley Publishers Ltd. pp.17-52.

Hazan, C., & Zeifman, D. (1994). Sex and the psychological tether. In K. Barthoromew & D. Perlman (Eds.), *Advances in personal relationships, Vol.***5**, *Attachment processes in adulthood.* London: Jessica Kingsley. pp.151-178.

Kato, K. (1995). An analysis of amae processes and interactions: A review and a proposal of process models. *Journal of Cognitive Processes and Experiencing*, **4**, 1-26.

加藤和生 (1999). Bartholomew らの4分類成人愛着尺度 (RQ) の日本語版の作成　認知・体験過程研究, *7*, 41-50.

Klohnen, E. C., Weller, J. A., Luo, S., & Choe, M. (2005). Organization and predictive power of general and relationship-specific attachment models: One for all, and all for one? *Personality and Social Psychology Bulletin*, **31**, 1665-1682.

中尾達馬・加藤和生 (2001). 成人愛着行動とはどのようなものか？―女子大学生の自由記述の内容分析を通して― 九州大学心理学研究, **2**, 99-106.

中尾達馬・加藤和生 (2003). 成人愛着スタイル尺度間にはどのような関連があるのだろうか？―4カテゴリー (強制選択式, 多項目式) と3カテゴリー (多項目式) との対応性. ― 九州大学心理学研究, **4**, 55-65.

中尾達馬・加藤和生 (2004a). "一般他者" を想定した愛着スタイル尺度の信頼性と妥当性の検討　九州大学心理学研究, **5**, 19-27.

中尾達馬・加藤和生 (2004b). 成人愛着スタイル尺度 (ECR) の日本語版作成の試み 心理学研究, **75**, 154-159.

中尾達馬・加藤和生 (2005). 成人における愛着スタイルと愛着行動の状況間一貫性　九州大学心理学研究, **6**, 9-20.

Nakao, T., & Kato, K. (2005). *Relative influences of internal working models at different levels on adult attachment behaviors*. Poster presented at the 17th Annual Meeting of American Psychological Society, Los Angeles, USA.

中尾達馬・加藤和生 (印刷中). 成人愛着スタイルは成人の愛着行動パターンの違いを本当に反映しているのか？　パーソナリティ研究, **14**.